

音楽科教育研究部

【平成29年5月現在】

主任 神山 ルミ子

部員 木村 麻美

研究主題

豊かな表現力を育む音楽科教育

目指す児童の姿

学びをいかし、対話を通して、共に新たな表現をつくり上げていく児童

研究目標

学びをいかし、新たな表現をつくり上げていく児童を育てるために、活用させる既習や経験を明確にした題材構成のもとで、教師の適切な手立てにより対話を充実させ、共に思考・判断しながら表現を高めさせる授業を構築し積み重ねることが、有効であることを実践的に明らかにする。

研究仮説

活用させる既習や経験を明確にした題材構成のもとで、教師の適切な手立てにより対話を充実させ、共に思考・判断しながら表現を高めさせる授業を構築し積み重ねることにより、児童は、学びをいかし、共に新たな表現をつくり上げていくことができるようになるであろう。

I 研究主題について

1 音楽科で育む力について

学習指導要領によると、音楽科の最終的な目標は豊かな情操を養うことである。3月に公示された次期学習指導要領に於いても、育成する資質・能力の中の一つとして豊かな情操を培うことが挙げられている。

音楽科では、音楽的な特徴という共通した部分においても、そこから感じ取り想像することは多様である。そのため、協働しながら学ぶよさがある。自分と友達の考えや感じ方の共通点、相違点に気づき、共感したりよさを認め尊重したりしながら、共に表現をつくっていくことは音楽科の特徴的な活動である。これらの活動はどれも「聴く」ことに支えられており、音楽科において「聴く」とは音楽と主体的に関わることである。聴くことで多様な考えや感じ方に触れ、よさを認めたり尊重したりする経験は、様々な国やジャンルの音楽、生活の中にある音楽等についても、共通点やそれぞれの価値を見出していくことにつながる。これを繰り返すことで、児童の他を思いやる心や優しさ、温かい心、また、創造性や向上心、音楽文化を尊重する態度や生涯にわたって音楽に親しみ愛好する心情も育むことができる。音楽科の特性をいかし、協働しながら学ばせることにより、上記のような表現力や態度、心情が生まれ、豊かな情操を養うことができる。

2 一年次の研究から

一年次は、思考・判断し友達と共に表現をつくる場において、意図を明確にし表現を高めることができるようにするための教師の手立てについて研究してきた。児童の表現の価値付けや聴き合う活動の充実等により、児童は音や言葉による対話を通して音楽表現をつくり、再考し高めていくようになった。また、よさを認め合う姿も見られるようになった。しかし、対話が十分にいかされず、音楽表現が高まりきらないこともあるという課題が残った。原因は、児童の表現を広げたり深めたりする教師の手立てが適切でなかったことである。二年次の研究では、気づきを促す働きかけや、既習を活用して表現を高めさせるような題材計画、表現を工夫するための視点や対話の視点の焦点化等の手立てにより、この課題を改善することができるのではないかと考えた。

以上、1、2を受け、今年度も研究主題を「豊かな表現力を育む音楽科教育」と設定した。音楽科において育成する「表現力」には、思考・判断した過程や結果を言語活動等を通じて表す力と、歌ったり楽器を演奏したり、音楽をつくったりする力の二つがある。本研究部では、「豊かな表現力」を、習得した知識・技能を活用しながら、音楽表現について思考・判断したり音楽の特徴や演奏のよさ等について実感を伴いながら考えたりしたことを、音や音楽、言葉等で表す力と捉えている。〔共通事項〕を学習の要とし、既習の活用を明確にした題材構成のもとで、主体的に音楽に関わりながら思考・判断し共に表現をつくる場において、教師の手立てにより対話を充実させることで豊かな表現力の育成を目指す。

II 目指す児童の姿とその具現化に向けて

研究主題を受け、「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、目指す児童の姿を「学びをいかし、対話を通して、共に新たな表現をつくり上げていく児童」と設定した。本研究部では、対話とは、音や音楽、言葉による交流を通して互いのよさや違いを認め、共に新たな気付きや考えを生み出そうとすることと捉える。2年時の研究においては、〔共通事項〕を支えとした音楽的な根拠や音楽的な情報を基に、共に表現をつくり上げていくことができるようにするために、以下の対話を学習活動に位置付ける。

- 1 音楽の特徴や演奏のよさ等を聴き取ったり感じ取ったり、表現を振り返り次の課題を見付けたりする「音や音楽との対話」
- 2 聴き取ったことや感じ取ったこと、それを基に表現したい音楽について考える「自分との対話」
- 3 表現について考えや意図を共有し、思考・判断しながら表現をつくるための「友達との対話」

「学びをいかし」とは、既習や経験を基に知識・技能を活用しながら表現について思考・判断することである。発達段階や題材相互の関連を考えた題材計画のもと、活用を通して知識・技能の更新を図る。それを繰り返すことで、活用できる知識・技能として身に付けさせ、表現についての意欲を高めていく。

「対話を通して」とは、児童が主体的に音楽活動に関わり、対話しながら共に思考・判断することである。このことにより、表現についての意図が明確になったり高まったりする。また、試しながら、音や音楽による対話を通して表現が高まることもある。音楽活動と言語活動を往還する対話により、音楽科ならではの実感を持った表現ができるようにする。

「共に新たな表現をつくり上げていく」とは、対話を通して独自の音楽をつくったり、一度つくった表現を見直し工夫を加えたりすることである。今の表現で満足することなく、再考し更に高めていこうとする音楽と主体的に関わる姿である。

よさ・高まりを実感させることができるように、つくった表現について適切な働きかけをし思考・判断を促すことによって、児童にとって価値のある表現になる。また鑑賞活動においても、聴き取ったことと感じ取ったことを関連させながら言葉や体の動き、絵や図等、多様な方法で表現させることで、楽曲のよさや面白さについて実感を伴いながら理解することもできる。友達と共に表現をつくり上げていく中で、考えや表現が尊重され認められることにより、児童は自分の表現や学びについての価値を見出すことができるようになり、豊かな表現力を育むことにつながると考える。

III 研究内容と方法

上記のような児童の姿を具現化するために、二年次は、以下の二点に重点を置いて研究を進める。

一点目は、知識・技能の活用を意識した題材構成である。活用させる既習や経験を明確にした題材計画のもとで、気付きを促す働きかけを行うことにより、習得した知識・技能の更新を図って児童の意欲と表現力を高めていくようにする。

二点目は、思考・判断し友達と共に表現をつくる場における対話を充実させるための教師の手立てである。表現の比較や提示、可視化、聴き合う活動の工夫、工夫の視点の焦点化等、対話によって表現が高まるように、見取りと適切な働きかけをする。

【参考文献】

- 石上則子『「音楽づくり・創作」の授業デザイン』教育芸術社、2016
加藤富美子『音楽科教育』一藝社、2015
文部科学省『初等教育資料』12月号、東洋館出版社、2016
同、4月号、5月号、10月号、東洋館出版社、2015
同、6月号、10月号、東洋館出版社、2014